令和元年度

非核平和広島派遣事業

―（ 感 想 文 ）―

愛　　西　　市

原爆ドーム前

令和元年８月５日（月）～６日（火）

生　徒	(佐屋中学校) 今枝　篤希　　木村　輝喜　　加藤　汐莉　　佐藤　妃茉莉 (永和中学校) 伊藤　亮太　　清水　結太　　大友　理好　　水野　来華 (立田中学校) 神田　蒼唯　　加藤　和樹　　中野　寛子　　神田　奈佑 (八開中学校) 中川　悠真　　安田　楽雅　　青山　遥音　　山田　ちゅら (佐織中学校) 山田　壮太　　大山　遥輝　　小林　美月　　西林　優見 (佐織西中学校) 稲生　蒼一郎　　中尾　奏太　　中島　史菜　　飯田　凜佳
引率者	小栗　佐知恵　（佐屋中学校）　山田　寿弥　（永和中学校） 蜂須賀　厚至　（八開中学校）　藤松　悠花　（佐織中学校）

（敬称略・順不同）

平和とは

佐屋中学校　今枝　篤希

私は今回の平和派遣事業で平和について多くのことを学ぶことができた。広島に着いて一番に思ったことは、広島という都市全体が「平和」を願っているということだ。原爆の被害を世界で最初に受けた都市。戦争の、原爆の恐ろしさを知っているからこそ、平和を強く願っている。74 年たってもその思いは変わらない。そして 74 年たっても変わらないものは他にもある。原爆の被害だ。

私は、今現在も原爆の放射線被害で亡くなっている人がいることを知ってとても驚いた。前年度から今年度にかけて、原爆関連死で約 5000 人の方が亡くなっている。原爆の強い力を知るとともに、やるせない悲しみが沸いた。

また、平和記念資料館を訪れると、目をふさぎたくなるようなものが多くあった。爆風で瓦礫しか残っていない町、重度のやけどを負った人々の写真。今では考えられないようなものばかりだった。他にも座っていた人の影の跡のついた石や、焼け焦げた三輪車など、原爆が落ちる数秒前まで人々がいつもと同じ生活をしていたことがよく分かるものが展示されていた。たった一つの爆弾が、広島の「いつも」を奪ったのだ。

そして、私は原爆についてあまり知らなかったということを実感した。爆心地は原爆ドームの真上だと思っていた。しかし本当はすぐ近くにある病院のほぼ上だった。今でもその場所には病院があり、隣には「爆心地」と書いてある看板が設置されている。看板がない限り誰も爆心地とは思わないだろう。このことから、テレビでは伝えきれない細かなことが広島には残されており、実際に訪れてみないと分からないものだと思った。

広島には「平和の灯」というものがある。この灯は 1964 年の 8 月 1 日以来燃え続けており、核兵器が地球上から姿を消したときに火が消される。この火が消えていない今を平和といえるのだろうか。「核」という大量殺人兵器が約 15,000 個もある今は何だろうか。

私は今、世界のすべての人々に考えてほしい。

「平和とは」。

「核兵器はいらない」

佐屋中学校　木村　輝喜

「ピカッドン」1945 年 8 月 6 日のとき、実際に被爆した人が思ったことです。僕は、この非核平和広島派遣事業に参加してみてとても良かったと思います。この事業に参加する以前は「広島は世界で最初に原爆が落とされたところ。」でしかなかったが、実際は言葉では言い尽くせないほど悲惨なものでした。広島平和記念資料館では実際に被爆したものが展示してあり、その一つ一つを見るたびに心が痛くなりました。その中でも特に印象に残っているものは、被爆した人たちの写真です。放射線の影響によって顔や舌などに死の斑点と呼ばれる黒い斑点が現れ、それが現れた人々は亡くなってしまうというものでした。それを見た僕は、あまりにもひど過ぎて、その写真から目を背けてしまいました。しかし、これ以外の写真を見ていくにつれ、これが原爆を落とされた人々のありのままの様子であり、原爆の恐ろしさを見ただけで表しているものであるため、自然にこれは目を背けてはダメだと思うようになりました。また、平和記念公園を案内してくださったボランティアの方は原爆によって自分の家族にも亡くなった人がおり、そのボランティアの方の言葉一つ一つに今までに感じたことのない重みがありました。その中で僕たちに原爆に関するものを説明していただいた後におっしゃった言葉で「あんたらがこのことを伝えていくんだよ。」この言葉は僕の胸に突き刺さりました。この言葉を単なる言葉にせず、まず身の回りにいる家族や友達に伝え、戦争の悲惨さを少しでも理解している人を増やしていきたいと思いました。

唯一の被爆国である日本。その恐ろしさは、実際に体験した我々日本人でしか分かりません。だからこそ自分たちは世界に向けて原爆について発信していく義務があると思います。しかし、この非核平和広島派遣事業で自分の原爆についての認識の低さを痛感しました。今後はもっと原爆の悲惨さを伝えていく必要があると思いました。

いつかこの地球から核兵器が無くなることを切に願います。

平和

佐屋中学校　加藤　汐莉

世界で初めて原爆が落とされたヒロシマ。私はここでたくさんのものを見て学んできました。空を見上げればきれいな青空が広がり、街を見ても戦争の跡など残っていないきれいな街。そんな広島の街に74年前、原子爆弾が落とされました。遺体が浮かび血で染まった川、皮膚がはがれた人、見たくなくても目に飛び込んでくる地獄の絵。そんな絵を実際に平和記念資料館で見ました。部屋一面に広がる焼け野原となったヒロシマ。骸骨で埋め尽くされた絵。放射線によって皮膚に着物の柄が焼き付いてしまった人。今では想像できないことがおきていたと考えるとゾッとします。これから先、この地球に人間が存在し続けるかぎり絶対に戦争はしていけないことです。最近では戦争を経験した方が少なくなり、次の世代に伝えていくことが難しくなってきている今、私たちにできることは何か。それは同世代の人に興味を持ってもらうためにこの広島派遣事業に参加した感想、体験したことをつたえることです。多くの人が戦争と向き合ってくれればきっと平和につながるのではないでしょうか。

毎年8月6日には平和祈念式が開かれています。そこでは原爆死没者名簿奉納や平和宣言、平和への誓いなどをおこないます。私の印象に残っていることはこども代表の平和への誓いです。自分よりも小さい子が戦争について深く考え平和を願い、多くの人に訴えかける姿を見て今幸せに過ごせていることのありがたさを改めて感じました。

「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。

二度と戦争をおこさない未来にするために。

この広島派遣事業で体験したことを忘れず、私ができることをしていきたいです。

今、自分たちにできること

佐屋中学校　　佐藤　妃茉莉

「私たちは、もっと戦争について知ろうとしなければならない」そう感じた二日間であった。

広島派遣で広島に行った私たちは、広島平和記念公園や広島平和記念資料館、原爆ドーム、宮島の厳島神社を訪れた。そして、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式に出席した。

終戦から約７５年たった今、戦争を経験した人は多くはない。だからこそ、戦争を経験してない私たちが戦争を経験した方々の貴重な話を聞き、理解し、自分たちの言葉で発信しなければならないと思う。

1945 年 8 月 6 日ヒロシマに落とされた原爆は、熱風や爆風、強い放射線によって一瞬のうちにたくさんの人々の心身を傷つけ、命を奪った。広島平和記念資料館には、そのとき傷つき、苦しんだ人々の写真や絵、当時使われていた日用品などがたくさん展示してあった。見るだけで、とても苦しく、そして悲しくなった。特に写真は、自分のなかにあった「戦争」というものの想像をはるかに超えるものだった。やけどで肌が焼けただれ、からだ中に包帯がまかれた女性、放射線によって着物の柄が背中についた人、一面骨で埋めつくされた場所、まだまだ衝撃を受けるものがたくさんあった。戦争というものがあったことを、残酷さを直に感じられる場所だった。

私は、この広島派遣の中で心に残った言葉がある。平和の誓いの中の「私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。二度と戦争を起こさないために。」という言葉だ。この言葉は、私の心に深く残った。

生きたくても生きることができなかった被爆者の方々のために、今の自分たちに何ができるのだろうか。戦争が起き、原爆が落とされ、たくさんの人々が傷ついた、この現実をしっかりと受け止め、自分たちの言葉で次の世代に伝えていくことが今の私たちにできることだと私は思う。

非核に向けて

永和中学校　伊藤　亮太

僕はこの非核平和広島派遣事業で、戦争を経験した方々が核兵器廃絶を訴えている意味がよく分かった。そして僕自身も、核のない平和な世界にしていかねばと痛感した。

被爆前の写真を見ると、広島の街はたいへんにぎわっていたことが分かる。そんな広島を一九四五年八月六日の午前八時一五分に、原子爆弾が襲った。それは一秒もしない内に広島を焼き払った。街だけでなく、人々の心も。前日まで楽しく遊んでいた友達や家族を一瞬で奪っていったのだ。

広島平和記念資料館には、当時の広島の街の様子や、被爆された方々の遺留品がたくさん展示されていた。その中でも三歳の子の三輪車を見たときには、激しい憤りを感じた。なぜこのような小さな罪なき子どもでさえ、このような被害にあわなければならないのかと思った。

今、中央アジアのカシミール地方をめぐり、核保有国であるインドとパキスタンが争っていて、もしかすると戦争になるかもしれないというニュースを見た。このニュースを見て僕は、また一部の大人たちの都合で、罪のない人々が傷つくことになるのかと思った。僕たちはそんな現状をそのまま見過ごしていいのだろうか。僕は、今日本が平和であるからこそできることがあると思った。だから、僕は自分にできることならぜひやっていこうと心に誓った。

広島派遣事業に参加する前と後とでは、戦争に関するニュースの聞こえ方が全然違って感じる。どのニュースを聞くにもとても関心をもって聞くことができた。やはり、本物を見るのと見ないのとでは全く違う。だからこそ、家族や友達にも、広島に行ったときはぜひとも原爆ドームや広島平和記念資料館に行き、本物を見てほしいと思った。

わたしたちの使命

永和中学校　清水　結太

原爆ドームが何かを訴えている。

元安川にかかる平和大橋を渡って、初めてそれを目にした時、私はそう感じた。

「原子爆弾により、どれだけの被害を受けたのか。」

親族を亡くされた、たくさんの方々が原子爆弾の被害について語るボランティアとして活動されていた。その人たちの話を聞くと、原子爆弾の悲惨さがはっきりと脳裏に映し出された。罪もないお年寄り、日常を送っていた通行人。十四万人というたくさんの方々が亡くなっていった。

私が一番ショックを受けたことは、三歳の男の子が被爆し、亡くなったことだ。その時、乗っていた三輪車は、今も資料館に残っている。他にも放射線による障がいなど、今なお続く被害に驚いた。例えば、被爆が原因となって、急性白血病にかかり、亡くなった佐々木禎子さんだ。元気に過ごしていた子が急に亡くなるとは、誰も想像していなかっただろう。

原爆の爆風の被害で亡くなった方だけではなく、日々苦しんで亡くなった方、急に亡くなった方もいるということを心に留めておかなければならない。

私たちはなぜ、非核平和広島派遣事業に参加したのか。それは、七十四年前のことを知り、若い世代の人たちに伝えるためだ。そして、同じ過ちを二度と繰り返さないためだ。

あの日は、原爆に対して無力だったかもしれない。だが、今日は、自由な言論のもと、核兵器に対して力を発揮することができる。そのことに気づくことができ、非常に有意義な体験となった。これらの体験を、次の人たちに発信していくことも、私たちの使命であると思っている。

だから、私たちは、決して忘れてはいけない。八月六日という日を。

「非核平和広島派遣事業に参加して」

永和中学校　大友　理好

一九四五年八月六日の午前八時十五分、人類史上初の原子爆弾が広島に投下された。地上約六〇〇メートルの上空で目もくらむ閃光を放って炸裂した原子爆弾は、小さな太陽のような火球を作った。その火球は一秒後には最大直径二八〇メートルの大きさとなり、爆心地周辺の地表面の温度は三〇〇〇から四〇〇〇度にも達し、多くの建物や人々が破壊されなくなった。―

八月五日、私は永和中学校の代表として広島派遣事業に参加した。平和記念公園で原爆ドームと平和記念資料館を見学した後、私はなんともやりきれない気持ちになったと同時に、強い憤りを感じた。特に、伸一ちゃんの三輪車と鉄かぶとを見たときには、大きな無力感に襲われた。

当時三歳十一ヶ月だった伸一ちゃんは、三輪車で遊んでいるときに被爆した。その夜、大けがや大火傷を負った伸一ちゃんは、水を求めてうめきながら亡くなった。父親は死んでからも遊べるようにと伸一ちゃんに鉄かぶとをかぶせ、三輪車とともに庭に埋めたそうだ。

私は、三歳という自分よりずっと幼い子どもが原子爆弾により明るい未来を失ったと知り、改めて原子爆弾の被害者をこれ以上出さないことが大切だと思った。そんなことは当たり前だと思う人もいるだろう。しかし、今も世界のどこかで核実験が行われ、いつ原子爆弾の被害者が出てもおかしくない状態にあるのだ。これ以上被害者を出さないために、全世界の人に、広島で起こったことから目を背けず、しっかりと理解してほしい。

最後に、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核を願い作られた平和の灯。私はこの火が、一日でも早く消えることを心から願っている。

平和とはなにか

永和中学校　水野　来華

二〇一九年八月五日、私は平和とはなにかを学習しに、広島へ行きました。日本は唯一、原子爆弾が投下された国です。広島はその「唯一」を体験した地域の一つです。私は初めて広島に行き、戦争の、原爆の怖さを改めて知ることができました。

広島平和記念資料館には、戦争の悲惨さが分かるものがたくさん展示されていました。原爆の被害を受けた瓦や、放射線によって人の影だけが残っている壁、大やけどを負ったたくさんの人々の写真、被爆したアオギリなど、目をそらしたくなるようなものがたくさんありました。その中でも一番印象に残っているものは、原爆によって亡くなってしまった子どもたちが、亡くなる寸前まで使っていた遊び道具です。当時三歳だった伸一ちゃんが使っていた三輪車や、亡くなったときにもかぶっていた鉄かぶとが展示してありました。当時、中学一年生だった男の子が使っていた弁当箱もありました。それらを見たとき、たくさんの感情がわき出てきました。自分たちより小さくて、夢や希望をいっぱいもっている子どもたちがたくさん亡くなったことを知り、何も言えなくなってしましました。

原子爆弾の被爆者の中には放射線を浴びたときではなくて、その何年後、何十年後かに病気になる方が多く、後遺症が残ってしまう人もいるようです。

一瞬のうちに、自分や家族の人生をめちゃくちゃにしてしまう原子爆弾、それを使った戦争。戦争を始めてしまった人間、人間が始めなければこのようなことは起こらなかったはずだ。私はこのような悲惨な出来事はもう二度と起こってほしくないので、今回聞いたお話をきちんと伝えていきたいと思います。

広島派遣事業を終えて

立田中学校　神田　蒼唯

僕は平和公園、資料館の写真、絵を見てどんな感情よりもまず衝撃が走りました。

八月六日午前八時十五分で止まった時計や血まみれ、黒こげになった人の絵などを見て、聞くだけでは感じられない衝撃と絶望感を感じました。

老若男女問わず、多くの人の命を奪った原爆。なぜ広島と長崎だったのでしょう。広島市に原爆投下すると決定したのは一九四五年五月十日のことでした。それ以前までは京都市、新潟市、現在、北九州市である小倉市も候補地とされていました。その中で広島が選ばれた理由として、広島の地形が原爆の実験をするのに適していた地形だったからだそうです。そんな理由で広島は一瞬で壊されました。そこから長い年月をかけ復興した広島の中で原爆ドームだけは、一九四五年から時が止まったようにボロボロなまま立っていました。

資料館、平和公園を訪問して驚いたことは、外国の方々が多くいたことです。たくさんの国の方々が原爆の事について少しでも知ろうとしてくれるとわかり、とても嬉しい気持ちになりました。

平和公園では、語り部の方が熱のこもった話をしてくださいました。その語り部の友人にも被爆した方がいて、辛かった経験を話してくださいました。その話の中でも峠三吉さんの詩が印象的でした。一生、この原爆を忘れられない、忘れてはいけないという気持ちが語り部の方からも三吉さんの詩からも同時に伝わってきました。

広島平和祈念式典には、さまざまな国の代表の方も参列していました。日本だけではなく多くの国も平和を願っていると思い、嬉しくなりました。広島で二日間学んできたことをたくさんの方にこの悲劇を知ってもらえるように伝えていきたいと思います。

核という冬、平和という春

立田中学校　加藤　和樹

八月六日、八時十五分、静寂を突き破ったそれは、一瞬にして十四万の「これから」を奪った。鉄をも溶かし、気体に変えてしまうほどの熱線、その後追うように何十万気圧という凄まじい爆風が、広島全土を押し潰し、人々を襲った。さらに、金属もものともしない放射線は、生き残った体の細胞を蝕み、壊し、その後に降り注いだ中性子は、ぶつかる物を悉く放射性物質に変えていった。川は血によって赤黒く染まり、人の焼ける臭いが鼻を貫く、僕は広島に行って壮絶な惨状を学んだ。その当時、被爆者に水を飲ませると死んでしまうという噂が広がっており、多くの病院に運び込まれた人々は水を欲しがっていたが、ほとんどの医者が飲ませることをしなかったという。欲しがる側、目を背ける側ともにとても辛かったことだろう。その苦しみを想像すると胸が痛くなる。

悪夢は、二度と繰り返されてはならない。それなのに、核はなくならない。なぜだろう。必要だろうか。恐怖をちらつかせながら生きる世界に、平和が語れるのだろうか。他国との競争、大国の核実験はまだ続いている。あまり知られてはいないが、そうした実験でも、人は大勢なくなっている。日本にとどまらず、ユーラシア大陸では既に何百万という人々が被爆者として苦しみを味わっている。衝撃だった。日本は確かに唯一の被爆国である。しかし、遠く離れた地域にも、同じ辛さを味わっている人がいるのだ。実験の施行者たちは、無残にも実験によって未来を失う、その悲しみに真剣に向き合ったことがあるのだろうか。

広島の惨劇から七十四年。絶望に浸っていた広島の人々は、今後七十五年間、草木は生えないだろうといわれた大地に咲く一輪の赤い花に希望をもらった。今、核にまみれたこの世界に、希望の兆しはあるのだろうか。

平和のために

立田中学校　中野　寛子

川に浮かぶたくさんの死体、目に杭がささった女の人、焼けただれた体で町をさまよう人々、水槽いっぱいに埋め尽くされた死体、黒焦げになった親子、自分の娘を焼く母親、見るも無残な光景がそこには描かれていました。
広島平和記念資料館企画展示室には、「市民が描いた原爆の絵」が七十点程度展示されていました。その絵は、戦争を写したどの写真よりも、戦争について書かれたどの本よりも、深く重く私の心の中に残りました。戦争の恐ろしさ、助けることのできなかった後悔、原爆の悲惨さ、それらが絵を見るたびにひしひしと伝わってきました。平和に暮らしている私たちにとって現実感がなかった戦争、原爆、どちらもたった七十四年前に起こった現実のことなんだと改めて実感しました。もう二度と七十四年前のようなことが起こってはいけない、そう深く感じました。

平和記念資料館、原爆ドーム、平和記念公園、平和祈念式、どの場においてもたくさんの人々が訪れていました。訪れる人々の中には、外国人の方も多く、様々な国の人たちが戦争、原爆について知るために訪れていました。平和記念公園には、数えきれないほどの千羽鶴が見られました。中には鶴を使った平和を願う絵もありました。私は、世界中のたくさんの人々が原爆、戦争について知ろうとし、平和な世界を望む人が多いことを感じることができ、とても心が温かくなりました。

戦争や原爆は恐ろしいものです。罪もない多くの人々の命を次々に奪っていってしまいます。今からたった七十四年前に起こったあの悲劇、もう二度と繰り返してはいけません。だからこそ、戦争や原爆について次の世代に語り継いでいく必要があります。私は、今回学んだことを多くの人に伝えていきたいです。

平和への道

立田中学校　神田　奈佑

私が初めて原爆ドームを見たのは、小学校低学年の頃です。原爆ドームの取材の様子をテレビで見ていたのがきっかけでした。その頃は、まだ原爆について何も知らなかったので衝撃を受けたことを覚えています。その時に私は、初めて広島や長崎に原子爆弾という恐ろしいものが落ちたことを知りました。それからも学校の授業や八月六日、九日のテレビなどで深く知っていきました。初めて知ってから七年、今年私は、広島派遣に参加を決めました。

今回、資料館、原爆ドーム、式典に行ったり、参加したりして感じるものがたくさんありました。資料館では、七十四年前に被爆した被爆者の私物や絵が展示されていました。服やカバンは、ボロボロに破れていて全く使えない状態になっていました。写真や絵は痛々しい傷あとや、目が飛び出ていたり、炎の中に飲み込まれていったり、川を流れていたりする遺体の様子などが展示されていました。小さな子供もいて、見ていてつらかったです。

原爆ドームを見て、私はとても不思議な気持ちになりました。目の前にあるのは実際に被爆した建物なのにそれを見て感じることがなかなかできませんでした。きっとそれは、今の広島に平和が訪れているからなのでしょう。式典に参加して、安倍首相や市長のお話を聞いて、被爆者の方々が少しでも安らかに眠ることができるようにと願うことができました。外国の方もかなり多く、広島の原爆について関心が高いことを知って、少しでも世界が平和になることを望む人が増えることが嬉しくなりました。

今回の広島派遣の経験を自分の人生に生かし役立てていくことはもちろん、少しでも多くの人に伝え、原爆の怖さ、悲惨さを伝える活動に力を入れて取り組むことの大切さを強く感じることができました。

「次世代に繋ぐ世界平和」

八開中学校　中川　悠真

七十四年前の一九四五年八月六日八時一五分のよく晴れた夏の朝、島病院上空約五八〇ｍでアメリカが開発した原子爆弾「リトルボーイ」が炸裂しました。爆心地内にいた五十六人を除いて全員即死、何とか生き残った人も大量の放射線により苦しめられました。

僕が資料館に入って初めに目に入ったのは、広島に原子爆弾が投下されてからの時間と最後に核実験を行ってから経過した時間です。原爆が投下されてから七十四年が経つにもかかわらず、最後に核実験が行われてから一年も経っていなかったことがとても悲しかったです。その後、資料館を見学すると、ものすごい温度により弁当の中身が焦げてしまった物、爆発まで遊ばれていた三輪車、焦げた衣類、皮膚が溶けてしまった人の写真など、今の日本で考えられない物が原爆の恐ろしさを物語っていました。

一九四五年八月六日の朝、広島の人たちが。八月九日の昼、長崎の人たちはどのような空を見ていたのでしょうか。それはきれいで透き通った空だったのでしょうか。希望、輝きに溢れた美しい空だったかもしれません。でも、数分後には誰もが見たことのない絶望の空に染まったと思います。しかし広島の人々は、長崎の人々は、今日に至るまで核のない世界へと、諦めないで世界平和を訴え続けてきました。だから今の日本では、戦争が起こっていないのだと思います。遠い昔日本で、世界で、武器として兵器として、戦争を終わらせるために、広島、長崎に初めて投下された原子爆弾は、今後の世界の原爆についての考え方を大きく変えさせられました。今まで日本で世界平和を訴えてきた被爆者の平均年齢は八十二歳を超えました。もう二度とあの悲惨な出来事が起こらないように、新しい時代を生きていく僕たちは、世界に訴え続けなければいけないと強く思いました。

「ヒロシマ」から学んだこと

八開中学校　安田　楽雅

「核兵器のない世界の実現」という同じ願いをもった大勢の人々と共に、僕は平和記念式典に参加しました。八時十五分、僕たちは黙祷を捧げました。七十四年前のこの時、広島の町は激しい熱と光、爆風により一瞬にして壊されました。僕は目を瞑ると、平和記念資料館で学んだことが思い出されます。被爆して町が鉄くずで覆われてしまったこと、熱線や放射線によってぼろぼろになってしまった被爆者たちの体。このような惨劇に見舞われた多くの原爆死没者への祈りと平和の鐘が響く一分間は、言葉では表せないような空気につつまれ、忘れることはできません。また、平和宣言の中で、「ヒロシマの心」という言葉がありました。それは、どんな理由があろうと二度と核兵器による惨劇を繰り返してはならないということだと思います。この心を忘れた時、再び同じような過ちを犯すことになるのだと思います。だから、これからの未来を担う若い僕達が「ヒロシマの心」を受け継いでいかなければいけません。僕は原爆ドームや資料館を見学し、献花や折り鶴を捧げることを通し、被爆者の心と向き合い、平和な世界を築かなければいけないという使命感を感じました。しかし、平和な世界を築くためには、もっと多くの人が広島を訪れるべきだと思います。僕も教科書等で広島のことについて分かったつもりでいました。しかし、実際に訪れてみないと感じられないことが本当にたくさんあり、平和に対する意識も変わりました。このようにして「ヒロシマの心」について理解する人が増え、全ての人が世界平和を願うようになったとき、「核兵器のない世界の実現」という広島の願いは世界中の願いとなると思います。

「原爆投下から七十四年」

八開中学校　青山　遥音

私は広島派遣事業を終えて、平和に対する思いを知り、今後、平和な世界を築いていかなければならないと強く思いました。特に、ボランティアでガイドをしてくださった方の話に心打たれました。そのガイドさんは、当時この場で起こったことをこと細かく説明してくださりました。その言葉一言一言が原爆に対し悔しい、悲しい、辛いという思いだったのが伝わりました。そこで止まらなかったのがヒロシマです。悲惨な出来事だった戦争を経験し、今の広島市に変わったことを体感しました。

「二度と私たちが住むヒロシマみたいに、辛い思いをしてほしくないの。」

と力強くガイドさんが言っていたのが印象に残っています。その思いを受け止め、世界平和を祈っています。

また、記念資料館を訪れたときに見た景色が忘れられません。どこを見ても建物と言えるものはなく、柱や木が立っているだけです。今までの日常が、七十四年前の八月六日、一瞬にして日常でなくなりました。私はこの写真を見て、考えることはたくさんありましたが、一番思ったことは「自分だったら…と想像できない」ということです。ですが、広島の町はこうなった。受け入れられない気持ちがありました。

今の広島市には観光に来た外国人が多く見られました。それだけ大きな町になりました。今も辛い人がいる中、これだけ大きく栄えた町になっています。辛い人に勇気を与えているように思います。この平和で笑顔あふれる町、広島を大切にしていくべきです。

このような貴重な経験と非核について、平和について考えさせてもらえた、広島派遣事業に感謝します。ありがとうございました。

「過去の思いを未来へつなぐ」

八開中学校　山田　ちゅら

広島に行き、学んだことがたくさんあった。まず１つ目は、今のたくさんの人が「平和」を望んでいること、はやく平和の灯火が消えてほしいと願っていることだ。平和式典のとき、あの場にいた人たちで平和を望んでいない人はいなかったと思う。慰霊碑の前に立ち、平和への思いを示す人らを後ろからつつむ平和の灯火は、世界がせかいになるまで燃え続ける。逆に、世界から平和がなくなれば、再び平和な時が訪れるまで燃え続けるのだという。まとめると、世界が平和になれば、平和の灯火は消えるのだ。この未来を望んでいる人は多いはず、私も早く消えてほしいと願う。

２つ目は、原爆の被害は想像以上だったこと。名前のついた小さな塊が、あそこまで大きな被害を与えるとは思っていなかった。核の威力は凄まじいと思い、何より自分の膝の力が自然に抜けたことで、あぁ自分はこれが怖いんだなと思った。でも、当時の人々の恐怖は、底知れないものであったと思う。一瞬にして全てが潰れたセカイ、残された人は何を感じたのだろう。どれだけ過去のことを振り返り、痛みを知ろうとも、当時の人は報われない。あの時の原爆は、人々の命を奪い、残された人々の生きる理由を奪っただけでは飽き足らず、それまでの人々が築き上げたもの全てを奪っていった。

しかし、今生きる広島の人々は、当時被爆した人々を、「意味のない死」、「意味のない人生」として扱うことを許さなかった。昔には戻れない。負った傷はすぐには癒えない。ならもう二度と、こんなことを起こさない。人々は、亡くなった命に約束した。「必ず平和を実現させる」と。私たちも同じだ。今、守るべきもの、見るべきもの、これらを理解し、生きていくことが、あの日消えた全てへのせめてもの弔いになるのではないか。

「平和と本当の幸せ」

佐織中学校　山田　壮太

戦後七十四年がたち、戦争を体験した人は世の中に多くはいません。このままでは戦争のこと、ヒロシマの悲劇が語り継がれなくなってしまいます。そのため、僕たちのような若い世代が後世に語り継いでいかなくてはならないのだ、という思いから今回広島派遣事業に参加してきました。

さすがに七十年以上も前のことだということもあり、広島市の町並みは高い建物が並び、路面電車も走っていて、戦争の面影を感じさせるものはありませんでした。しかし、原爆ドームの前に立ったとき、僕はまるで七十年前に戻ったかのような感じがしました。屋根部分は鉄骨がむき出しになり、壁は剥がれ落ちていたり、崩れていたり、また崩れた壁の破片なども建物のそばにごろごろと転がっていたりしました。ものすごい熱線と爆風が人々を襲い、近くにいた人々は一瞬にして命を失いました。爆心地の温度は数千度にもなったと言われています。原爆ドームは、これまで何度も写真などで見たことがありましたが、そこでは原爆の恐ろしさを教えてくれる語り手のような存在で、悲しそうに、静かに座っていました。たった一発の原子爆弾が、何万人もの人生を変えてしまうこと、そして、街を壊してしまうことを教えてくれました。

平和祈念資料館では、被爆した人々の当時の写真や服、遺品などが展示されていました。その中には、何枚も痛ましい写真があり、言葉では言い表せないような気持になりました。全身に火傷を負って寝たきりの男性、全身黒焦げで亡くなった子ども、救護所の学校に集まった何百人もの患者。生きていることに苦しみを感じるほど、原爆の被害はすさまじいものだったのでしょう。僕は、戦争のない時代に生まれただけでも幸せなのだと感じました。

資料館には他にも、地球平和監視時計と呼ばれる時計がありました。現在時刻を示す文字盤の下に、広島への原爆投下からの日数と、世界で最後に核実験が行われてからの日数が示されていました。最後の核実験からの日数は一年もたたずにリセットされるそうです。この日数がリセットされないようになるまで、世界に平和は来ないと思います。

時が経つのは早く、いずれ戦後百年となるときが来るでしょう。その時代を生きる人々にとって、『幸せ』とは何でしょうか。僕は、平和があって、初めて『本当の幸せ』がやってくると思います。今は、戦争中よりは幸せでしょう。では、『本当の幸せ』とは一体何なのでしょうか。その『幸せ』のために、世界から核兵器が消えて、世界が平和になることを祈ります。

「平和への道のり」

佐織中学校　大山　遥輝

二日間の広島派遣事業を通して、色々な話を聞いたり、自分自身で見たりしていく中で、今の世の中を平和ということができるのかと思いました。

今、戦争が起きていない、ただそれだけの理由で平和と言えるのでしょうか。原子爆弾が落とされてから七十四年たった今でも、後遺症に苦しんでいる人がいます。たくさんの人が苦しんでいる現状を知っているのにも関わらず、核兵器を持っている国が多くあります。

戦争は多くの人を苦しめます。実際に被爆地である広島へ行き、多くのことを感じました。街の中心に出れば、七十四年前から様変わりした高層ビルやマンションが立ち並んでいました。しかし、爆心地近くでは、記念碑が多くあり、平和への思いがつづられていました。それを見て、年齢、性別、国籍の違いはあっても、平和を願う気持ちは同じなんだと実感しました。

二日間の中で最も印象に残っているのは、原爆被害の象徴とも言える原爆ドームです。原爆ドームは、もともとは広島県産業奨励館と呼ばれていましたが、原爆が投下されたことによって、原爆ドームとして、現在まで受け継がれています。原爆ドームを自分の目で初めて見て、被害がここまでのものだとは予想もしていませんでした。鉄骨がむき出しになったドーム。建物のまわりに散らばったがれき。そこだけ七十四年前から時が止まっているようでした。にぎわっていたその頃の姿を一変させたもの。それが原子爆弾なのです。

原爆投下から七十四年の月日がたち、被爆者の方の体験を聞く機会が減ってきています。だからこそ、過去の戦争の現実を知り、後世へ受け継ぐことこそ、平和への第一歩だと思いました。世界平和に向けて、広島の人々の思いを未来につなげていきます。

「広島の人々と私たち」

佐織中学校　小林　美月

私は広島の町を見てまず驚きました。原爆が落とされたとは思えないくらい人々は活気に満ち溢れ、発展していたのです。

平和記念資料館で私は想像をはるかに超える原爆の恐ろしさを知りました。一九四五年八月六日に広島に原爆が投下され、人々は数千度の爆風と熱線、そして、目に見えない害のある放射線に襲われました。広島の人々は一瞬で焼け死にました。また、生き残った人々も全身に火傷を負い、皮膚はただれて水を求めて苦しんでいたと当時その光景を見た人は文章や絵で語っていました。私はそれらを見たとき、恐怖や悲しみといった感情と共に、今ある普通の生活に感謝したいという感情があふれ出てきました。私たちが当たり前に生きている日常が七十四年前はなかったのです。一日一日を必死に生き延びることを第一に七十四年前の人々は生きていたと思います。私は被爆した人々に寄り添い、向き合うことが大切だと思います。七十四年前の惨禍を繰り返さないためにも、核廃絶を目指し、戦争や原爆について学んで知識を広げていくことが、今私たちにできることだと思います。

現在、核兵器の脅威というものを知っていながらも、核兵器を保有している国が何ヵ国かあります。私はこの状況があるということが許せません。しかし、今この状況を大きく動かすことはできません。そのため、私は少しずつこの状況が改善されていくのを願うのと同時に、戦争や原爆がどれほど罪のない人々を巻き込み、命を奪うのかということを後世に伝えていきたいです。それが、平和への貢献にもつながると思います。また、日本のみならず、様々な人たちが平和について考えてほしいと願っています。

これからは今ある生活が当たり前とは思わず、一日一日がかけがえのない大切な一日だと考えながら生活していきたいと思います。

「広島に行って思ったこと」

佐織中学校　西林　優見

平和。それは誰のためにあり、何のためにあるのか。広島派遣事業はそう考えさせられるきっかけをつくってくれました。

広島県に行って心に残ったことが三つあります。一つ目は、平和記念公園を歩いたことです。原爆の爆心地に近く、都会とは思えないほど木がたくさんあってセミの鳴き声がうるさいくらいに鳴いていました。そこには、外国人の記念碑がいくつか建ててありました。原子爆弾が投下された後、けがの薬を外国から輸入してけがの治療にあたった外国人や、戦争で肉親を失った子どもたちを保護してくれた外国人がいたということを知りました。

二つ目は、平和記念資料館です。私はこの平和記念資料館が一番気になっていた場所でした。暗い空間に、写真や絵、遺品が展示されており、一つずつスポットライトがあてられていました。どれもが痛々しくて思わず目を背けたくなる写真もありました。ここで見た中で、印象に残っているフレーズがあります。それは、「働けば、死ぬくらい痛い。働かなければ、もっと痛い。」というものです。当時被爆者は、周囲からの偏見に苦しんでいました。働かないと死ぬ。でも働くことができない。この、どうすることもできない窮地に立たされ、精神が崩壊した人がたくさんいました。周りからは精神異常者として冷たい目で見られていたそうです。私はとても胸が苦しくなりました。そしてなぜか、腹が立つような感覚を覚えました。

三つ目は平和祈念式典です。実際に行ってみて、小学生からお年寄りまで幅広い世代が来ていることを知りました。外国からもたくさんの人が来ていました。世界で唯一の被爆国だからこそ、この式典は永遠に続けていかなければならないと痛感しました。

私は広島県で核の恐ろしさ、悲惨さを学ぶことができました。そして、平和記念公園に飾ってある折り鶴や、平和をこれからも守り抜いていこうとする人々の姿に心が温かくなりました。平和は、全世界一人一人のためにあり、平等に生きるためにあると思います。広島県で学んだことをなるべく多くの人に伝えていきます。

広島を訪れて

佐織西中学校　稲生　蒼一郎

八月六日、午前八時十五分に、広島に原子爆弾が落とされました。アメリカのこの攻撃により約十四万人の方々が犠牲となりました。犠牲になった方の中には、高温の爆風などにより一瞬のうちに命を失った人や、後遺症により苦しめられた後に命を失った人がいるということを聞きました。僕は、この原子爆弾によって十四万人の犠牲者が出たということを聞いたときは、普通に生活していた人達を無意味に殺すということは、ありえないと思いました。たとえ、国同士で問題があったとしても、罪のない人を殺したりしてはいけないし、このような悲惨なことを、もう二度と繰り返してはいけません。

広島の平和記念資料館を見学して、当時の写真や物を見ました。それは、見ただけで当時の悲惨な様子が一目でわかるものでした。八時十五分で止まった時計や、壁についている人の影などがあり、僕が一番衝撃を受けたのは、目がとれている人の絵でした。写真ではなかったため、最初は本当なのかなと疑ってしまいました。その絵の下での説明には、「爆風で皮膚が溶けて、目や内臓がこぼれおちた」と書いてありました。僕は、皮膚が溶けるという言葉を聞いたことがなかったので、想像することができませんでしたが、原子爆弾がどれほどの威力なのかということはわかりました。僕は、資料館を見学しているときに、「こんなに威力のあるものを、なぜ二発も落としたんだ」と思いました。

この当時の人たちは、普通の生活をしたくてもできない日々が続いていて、とても苦しかったと思います。毎日、家の上を爆撃機が通ったりして眠れない日々を過ごしていました。なので、今僕たちが当たり前のように生活できるということに感謝していきたいです。

最後に、核を使った攻撃などで、あの日の悲しみや苦しみをもう一度繰り返してはいけません。

ヒロシマを訪れて

佐織西中学校　中尾　奏太

僕は初めて広島を訪れました。想像では、町全体が被爆したことを訴えかけているようなのが広島だと思っていましたが、実際はそんなこともなく普通の都市にみえました。しかし、平和記念公園周辺は違いました。とても静かでした。公園に入ったらしゃべってはいけないと感じました。それは平和記念公園が原爆の恐ろしさを私たちに伝えてきたからだと思います。

平和記念公園のなかで一番目立っていたのは「原爆ドーム」でした。「原爆ドーム」の昔の写真と今の「原爆ドーム」を比較すると昔の三分の一くらいしか残っていませんでした。また、なくなってしまった場所の下にはがれきがたくさんありました。なくなってしまったところのです。それでも「原爆ドーム」は、堂々とそびえたっていました。

広島市内や平和記念公園周辺には、たくさんの外国人の方々がいました。また、平和祈念式典にもたくさんの外国の方々がいました。僕はとてもうれしかったです。なぜなら、外国の方たちがわざわざ日本に来て「おもしろい」や「楽しい」などの観光地とはかけはなれているのにも関わらず、平和記念公園や原爆ドームにきてくれているのです。そのためか、案内板などに外国語がたくさん書かれていました。こうして核兵器の恐ろしさを国内のみならず、外国の方々に知ってもらうことで、核兵器廃絶に向けた運動がより一層活発になると思います。地球の平和を守るためには必要不可欠だと思います。一日でも早く、地球上から核兵器がなくなることを願っています。

非核平和広島派遣事業へ参加して

佐織西中学校　中島　史菜

私は、非核平和広島派遣事業へ参加したことで、今生きていることの大切さ、朝起きてご飯を食べて、学校へ通うという日常は当たり前ではないことに気づかされました。

私は、平和記念資料館で、原爆についての資料をたくさん見ました。ボロボロになって焼け焦げた服、髪は抜け落ちいたるところにやけどを負った人々の写真、どれも目を覆いたくなるほどの痛ましいものばかりで、見ているだけで辛い気持ちになりました。なかでも特に印象に残る資料は二つあります。一つ目は「被爆から七年後に発掘された遺体」という写真です。ずらっと頭蓋骨が並んでいるのを見て、その無残な光景に身の毛がよだつ思いをしました。二つ目は、被爆前の無邪気な笑顔をみせる子供達の写真と、被爆後の悲しみに満ち溢れた目をしている子供達の写真です。あんなに嬉しそうににこにこして、未来への希望を持った子供が、こんなに悲しい顔になるなんて、原爆ってひどいものだなと思いました。そして、この子の親は亡くなってしまったのかなとかを考えると、もう見るにたえませんでした。私はそれらをみて改めて、今後二度と同じ過ちを繰り返してはならないと強く思いました。

戦争、原爆を体験していない私達は、平和への関心が薄くなっていると感じます。だからこそ、このような事業に参加した私は、平和についての関心をもっとみんなに高めてもらうために、学んできた平和について、家族や友達に話していきたいと思いました。

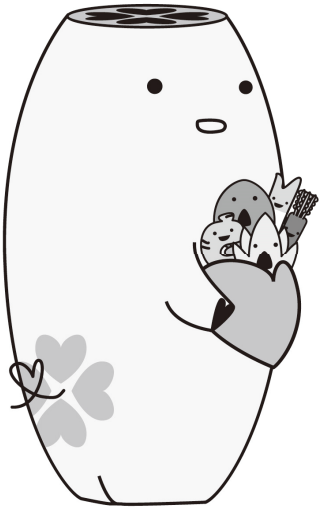
広島派遣に参加して

佐織西中学校　飯田　凜佳

私は広島派遣に参加して感じたことは３つあります。

一つ目は、恐怖です。資料館に展示してある絵は、原爆が投下されてすぐに描かれている絵もありましたが、大半が何年も経った後に、被爆者の人たちが描いていました。何年も経ってしまうと、普通の出来事は記憶が薄れていきます。しかし、あの絵は細かいところまで鮮明に書かれていて、文章でも、説明書きがしてありました。原爆投下から何年経っても、あの悲惨な光景が脳裏に焼き付いて、忘れることなどできない、恐怖の塊だと思いました。

二つ目は、原子爆弾の威力です。被爆者の人たちは、原爆投下から何年も経ってから、病に倒れて亡くなってしまった人もたくさんいました。また、髪の毛が抜け落ちてしまったり、たくさんのブツブツが体中に出てしまったりしていました。直接、原爆の爆風や熱風で被害をまぬがれても、その後に病気などで死んでしまう人が大勢いると思うと、威力はすごいんだと思いました。

三つ目は、平和を思う気持ちです。原爆の悲惨な過去を二度と繰り返さないように非核運動を続けている人や、ボランティアで私たちのような人たちに、原爆のことを伝えている方がたくさんいらっしゃいます。それは、日本人だけではありません。外国人の人たちも、たくさん活動をしていることを初めて知りました。世界中の人たちが平和を祈っていたのです。平和式典にもたくさんの外国人が自分の意思で来て、被爆者の霊に花をたむけて祈っていました。私は、そんな姿に感動してしまいました。

私が広島派遣に志願したのは、広島のことをより多くの同級生や下級生に伝えたいと思うからです。私が見た広島の絵画、未来へと続く原爆による病への恐怖、日本人だけではない、世界中の人々の平和を祈る姿。広島に行かなければ、知らなかったことです。これらのことを多くの人に伝えることと共に、平和の大切さを心に刻み、これからの日本の未来のことを考えていきたいと思います。